

庭の池、ホタル乱舞を

昭島の西川さん 観賞会構想も



自宅の池にホタルの幼虫を放流する
西川さん（右）と、井上さん

多摩地区屈指の製糸会社だった「西川製糸」の創業者のひ孫で、脊椎腫瘍のために車いすで生活する昭島市中神町、西川知恵子さん（80）が自宅の庭を整備して今春から、ヘイケボタルがすめる水辺作りに挑戦している。これまで約500匹の幼虫を放流した。西川さんはホタル舞う7月に、少人数ずつ近隣の人や知り合いを招いて観賞するオープンガーデンの開催も考えている。

西川さんの自宅近くの小川には元々、ゲンジボタルが生息しており、毎年6月頃にはホタルが観察できるという。特に数百匹のホタルが乱舞した2007年夏には、「ホタルを楽しめる水辺を作りたい」と考えるようになった。

そんな中、母校・都立南多摩高校（旧・第四高等女学校）の卒業生が集まる総会で、「日本ホタルの会」理事を務めていた青梅市の井上務さん（61）の講演を聞き、協力したいと願い出た。

井上さんはまず、ホタルのエサとなる淡水に生息する巻き貝「カワニナ」を育て、近くの小川に放流してゲンジボタルを増やすことを提案。西川さんは水槽などを買って、自宅で繁殖させることにしたが、カワニナの体には天敵となるヒルが付着していることが多く、飼育が難しく断念した。

ホタルの飼育実績がある知人の愛好家に相談したところ、自宅に池を作って、「温度管理などが比較的簡単とされるヘイケボタルを育ててみてはどうか」とアドバイスを受けた。

35歳で車いす生活を余儀なくされた西川さん。自宅を改築した際には、池は手入れが難しいため、枯山水にしていた。そこで、井上さんらがスコップで庭に穴を掘り、池底と側面をコンクリートで整備。自宅から水道水を引いて池を完成させ、4月中旬から3回に分けて、知人男性が飼育するヘイケボタルの幼虫約500匹とカワニナを放流した。

ヘイケボタルでも飼育は難しく、成虫になるのは200匹程度だが、約1か月近くは光を放ちながら飛ぶ蛍が見られるという。西川さんは「ホタルの幻想的な光を楽しんでほしい。今後も環境をさらに整備して成長を見守っていききたい」と話している。

（2012年5月26日 読売新聞多摩版）